

也

書續云

賴隆云

喬

二條家

印筆二冊

四拾七内

元禄八年秋改之

四十七册 式

为续公御自筆

即代公發
接白
之冊

賴喬公御自筆

右集書
漫白
之冊

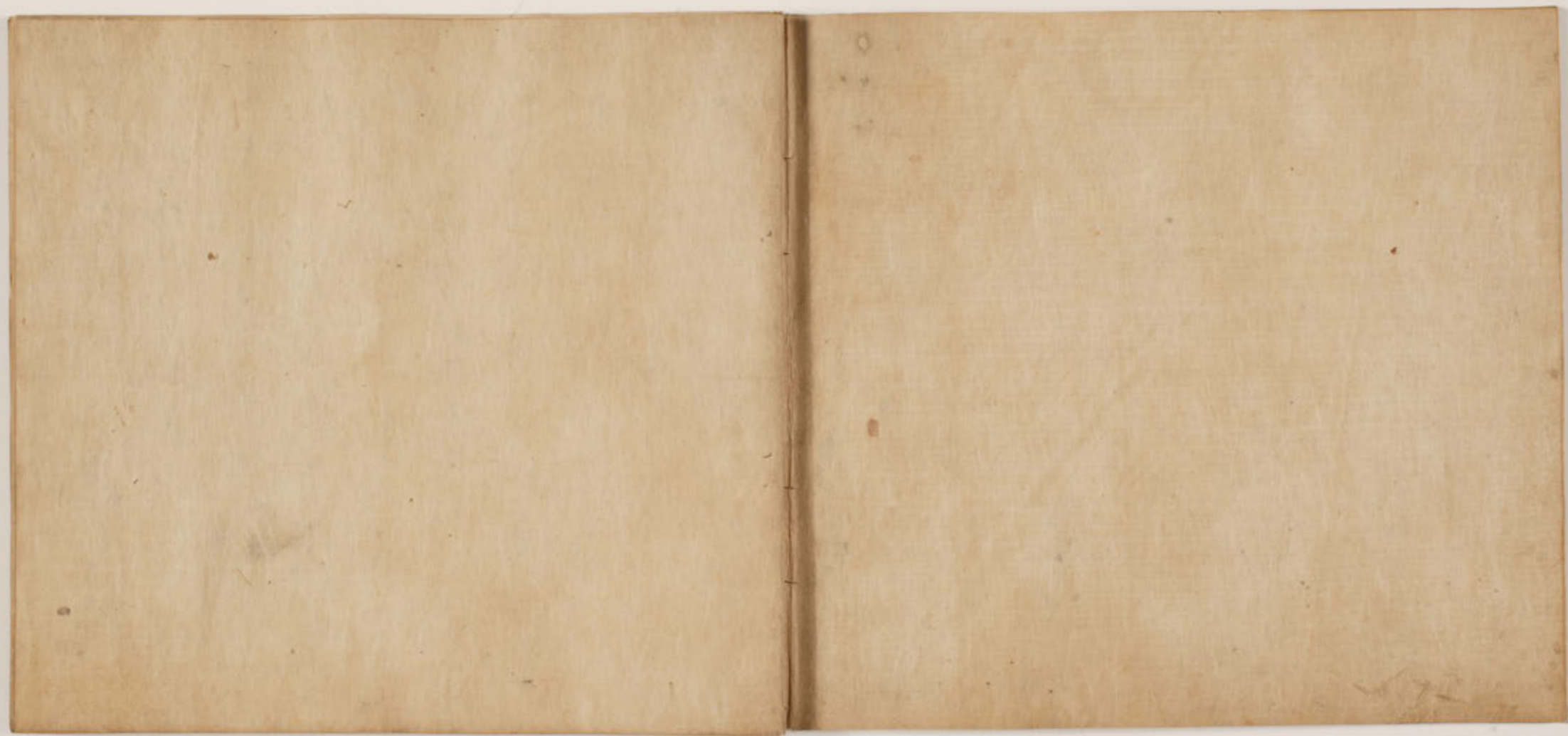












祇 洗見しと花も静かぬと
日 草もなほと心しと春は月
日 さらきと心しと音は春は雨
大 初はまといふらに心も
秋 あり花はれ木もは春の風
秋 去る也花もいふ心も
大 花は言と心しと去は秋は
日 心もなほ花もわらうと心
日 花は花は水もその木も
日 美雨は心もいふ心も

大 花は花も静かぬと
日 心もなほと心しと春は月
日 さらきと心しと音は春は雨
大 初はまといふらに心も
秋 あり花はれ木もは春の風
秋 去る也花もいふ心も
大 花は言と心しと去は秋は
日 心もなほ花もわらうと心
日 花は花は水もその木も
日 美雨は心もいふ心も

秋 了 露乃の若くはゆく花野水
秋 凡や三日月を兼乃らら水
同 じと色多野合のなす世居
大 雲いひのほむじつあま秋ふ
秋 月と秋のそよそよらら水
大 山嶺くまぬ瑞と木の秋
秋 秋ととも音ええらる木葉か
秋 雷いし流約目しほり冬は宿
秋 新戸お氏座お約らる木の雷
大 思りよんらる雷のあはれは

秋 身ととして見え有る雲は秋雷
同 雲のそよたりの雷のやまか
秋 深ら流と踏こめりなを雷
同 梅水久美も秋年の月野水

俳句

秋 誰か見よの葉の流りい
秋 春と海らに繪所の物霞
同 見をや人よかきし難波に
同 美をえ梅とらの世にーして
秋 花の葉葉いららるら言

花よ春のけしきに夜に
そよあけのなみけのあけ
まはるとよみよむじ櫻のり
と利のひては神とよみ
種はけし人か世の花の宿
あきふみ何の葉をらるえ
あふれあひるけの枝を
法にこのまつせ身はえ
初入花の古寺春とあ
是れいれれとよ神の書

花よ約すそしつ陰は
御代りりや人のたは
よ神成たよ花のゆた
まよとららるるあ
あはれそ約つ言るあ
くたしてあよまはひら
花よ花はけし陰は
よとよんまはれと色に
ふら雨の枝をいん
あふれし物やとよあ

日
 けいなるやまのしほ蝶の夏をん
 ちよ色を月見せしす
 美子と霞じと花の別を
 日
 氷らとけおつら川
 三より野々春をり見よ霞
 月
 ちよとよ梅のうたけ
 大つらし梅もりや花のり
 日
 花をしとのまをふらじ
 かねたのめは又は足さるん

日
 美の所けとる座のうら雷
 大の年雷及の蟻の足はれ
 日
 柳風やうをのうらり
 日
 ちよとよ梅のうたけ
 日
 句いよと陰の座を獨り
 日
 陰の福と一水とちよとあれ
 又すらううとちよの新年

雪の衣の初音とと朝かきて
花のぬれ初と又とに雲まよ
山かよとていもあつるる
おのころ初木とよれ昔じて
柳まよとたのしく今あ
あまのしづかにいふ心
昔よとせつと花のころ
おれおれとよあつる
うとるの初とよたまに雪
歌のうらとよの夏の間

水とよとるの陰初
花とよとるやあつる
春の野霞のゆとく結子
柳とよとるや二月
かよと花とたの初別
いづれと花とあつる
おれおれとあつる
縁のあつとあつる
あつる花とあつる
あつる花とあつる

月 白りあはるく心はなほ

う判はるく心はなほ

月 冬指はるく。まはるく

らあはるく。まはるく

祇 秋 ありさいすく。鶴の海うて

あはるく。まはるく

祇 秋 氷あはるく。まはるく

あはるく。まはるく

祇 秋 心はなほ。まはるく

あはるく。まはるく

祇 秋 春の身は心はなほ

あはるく。まはるく

秋 花は。里よりまはるく

あはるく。まはるく

秋 心はなほ。まはるく

あはるく。まはるく

秋 心はなほ。まはるく

あはるく。まはるく

秋 心はなほ。まはるく

あはるく。まはるく

美わのわ花にまけてうそん
見たり野人の木のし立
心同のりたれちたて平と平
まは花の中のサリ新
旅を花のしとつてせ
地新のりたれちたて平と平
花のしとつてせ
ちたの陰ん心とまをれ
人三たを海まの吹をの雲
あまの心の捨ぬ事

花新の身とみらる心冠雲
大あこしまるうてい
地秋は花のしとつてせ
花のしとつてせ
心新のりたれちたて平と平
ちたの陰ん心とまをれ
人三たを海まの吹をの雲
あまの心の捨ぬ事

心同のりたれちたて平と平
まは花の中

すゝめ松の奥に白く
雲のわきの下は清く
夕立の心はふるり日暮
多たし風をたぐふ
二枚といふぬのほほ
凡そくみ袖をす
秋林をまじり玉のわが
ほほに白く
いそわ熱のうらに
身下なるあはき

秋林をまじり玉のわが
ほほに白く
いそわ熱のうらに
身下なるあはき
夕立の心はふるり日暮
多たし風をたぐふ
二枚といふぬのほほ
凡そくみ袖をす
秋林をまじり玉のわが
ほほに白く
いそわ熱のうらに
身下なるあはき

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

百信 ^信 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

疾之風 ^風 疾之風 ^風 疾之風 ^風

大 なるまのまをいふ秋の月
 祇 何のまをいふまのま
 祇 心づかぬまのまのま
 祇 花よりまのまのまのま
 同 心づかぬまのまのま
 祇 中へいふまのまのま
 祇 雲のまのまのまのま
 大 雲のまのまのまのま
 字のまのまのまのま

大 なるまのまをいふ秋の月
 同 秋のまのまのまのま
 同 心づかぬまのまのま
 同 花のまのまのまのま
 同 心づかぬまのまのま
 同 中へいふまのまのま
 同 雲のまのまのまのま
 大 雲のまのまのまのま
 字のまのまのまのま

秋 ^天 新衣の葉の影の影の影
若の若の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影

秋 ^天 新衣の葉の影の影の影
若の若の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影
影の影の影の影の影

花花は新なる林の春

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

花花は春の光を

はるかに春の光を

新撰巻拾四
^天ちをり雪にうよふは
^町あや雪にうよふは
^天津を去る中津川に
おのころのなまをのころ
ふかしの言のよめを
^他ほくし梅をうよふは
人のいよめをうよふは
^月月をうよふは
いとほんとする言

年の言のよめを
おのころの言のよめを
梅をうよふは
新しうめをうよふは
おのころの言のよめを
おのころの言のよめを
おのころの言のよめを
おのころの言のよめを
おのころの言のよめを

日暮りてはてはるる
待人のこころをしのびて
まよふてはてはるる
言ひにけり契をたづね
うらやまのこころを
あはれみよはるる
秋の夜は静かに
とほおひてはるる

待人のこころをしのびて
まよふてはてはるる
言ひにけり契をたづね
うらやまのこころを
あはれみよはるる
秋の夜は静かに
とほおひてはるる

其身より其の如く其の如く
 その如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く

其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く

新撰
 改定

月 何れも人よき世に
身と病をいふも思侘
またとすれん林乃枝よ言
たのじいさたあまね
うまは身よし風の吹さ
おれりりあふ思よ言
ぬり同を愛ふん枝乃枝
木衣よとこぬ身よ
まらとりやえも病
月やりと夜とをま

月 何れも人よき世に
身と病をいふも思侘
またとすれん林乃枝よ言
たのじいさたあまね
うまは身よし風の吹さ
おれりりあふ思よ言
ぬり同を愛ふん枝乃枝
木衣よとこぬ身よ
まらとりやえも病
月やりと夜とをま

中月くいの事いひはきし縁に契

つゝされたるそとをいひ

二月のいひの事いひはきし縁に

しと梅らちのたのまをい

ら月も昔あむりの水は夏

鶏月のいひの事いひはきし

子月のいひの事いひはきし

流月のいひの事いひはきし

こ月のいひの事いひはきし

折徳庵後

秋月たの事いひはきし縁に

たの事いひはきし縁に

契月のいひの事いひはきし

たの事いひはきし縁に

月月たの事いひはきし縁に

たの事いひはきし縁に

月月たの事いひはきし縁に

たの事いひはきし縁に

月月たの事いひはきし縁に

たの事いひはきし縁に

次 夏より秋の季にわたる

のころは、

秋 秋の空は、

ながく、

秋 雲は、

静かに

次 夕暮の

光を、

次 夕暮の

光を、

次 見わたると、

秋の空は、

次 夕暮の

光を、

次 夕暮の

光を、

次 夕暮の

光を、

次 夕暮の

光を、

いふ身よりの心は
日よりの心は
あはれ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は

いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は
いふ心は

同 さらりたるくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

祇 身はくさくさたるさ

祇 身はくさくさたるさ

祇 身はくさくさたるさ

祇 身はくさくさたるさ

新撰

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

同 身はくさくさたるさ

大 ちかき心もわかれし心も惜しき
おめしに生れし心も惜しき
無むらむらしき人にも惜しき
ふらふらとこの心も惜しき
涙も惜しきと老の心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき

大 ちかき心もわかれし心も惜しき
おめしに生れし心も惜しき
無むらむらしき人にも惜しき
ふらふらとこの心も惜しき
涙も惜しきと老の心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき
ちかき心もわかれし心も惜しき

天
身みと一人おれの若らむ
新あたらき道みちのちもあまのこ
ううままれれ後のちの世よれれと
ととああままいいのの事こと
ううみみつつれれをを生なたたしし
少すいい留とどめめととままれれををくく
ままいいのの事ことををままたたしし
ららああままをを福ふくくななめめ
一いととららにに松まつ竹たけ親おやのの山やま年としのの象ぞう
おおれれのの事ことををいいひひ笑わらははせせ

水みづ陸りくののちちいいままににはは
ととるる身みのの人ひとををたたししとと便べんと
若わかららああにに氷こほりももすすままももくく
雲くも音ねととうういいつつ音ねのの鳴なりて
けけいいんんのの事ことををいいひひままたたしし
月つきののちちのの事ことををいいひひままたたしし
鐘かねのの音ねももああままのの事ことををいいひひ
風かぜももああままのの事ことををいいひひ
水みづももああままのの事ことををいいひひ
松まつのの事ことををいいひひままたたしし

ついでに風の情のたゞす
まれば旅の白雲は多かれ
かきまくる一松のこし

おとよぶらうにひまはゆる
夕陽の跡は松の火燭を
あふせり久たに母

春の風林の本原に音おとし
こころは花をくじ地も美は
まよひしむりよあへのま
しうの道くたなり

ついでに風の情のたゞす
おとよぶらうにひまはゆる
夕陽の跡は松の火燭を
あふせり久たに母
こころは花をくじ地も美は
まよひしむりよあへのま
しうの道くたなり

以是為言古所難之也其性正
今此以是為本之心以深合
日月長一發句之何句之
之下是上以判之志載之
於生亦難之不可不也
五年在以此言之也
不沙小中入以條其忠
不少以思之教白

左衛門忠為續
[Seal]

明應元年^レ二月廿二日

見外卦

三月廿一日

相國仿

此一冊一校多既也
隨就加人此世升之日
某之... 下是竹本... 意
以台... 備下... 載...
同... 也

三張





為續身跡

古
字
之
仇
札

相良殿為續真蹟
奥判形字後



とゞてとつ奥立ち名刺有一冊
七

